

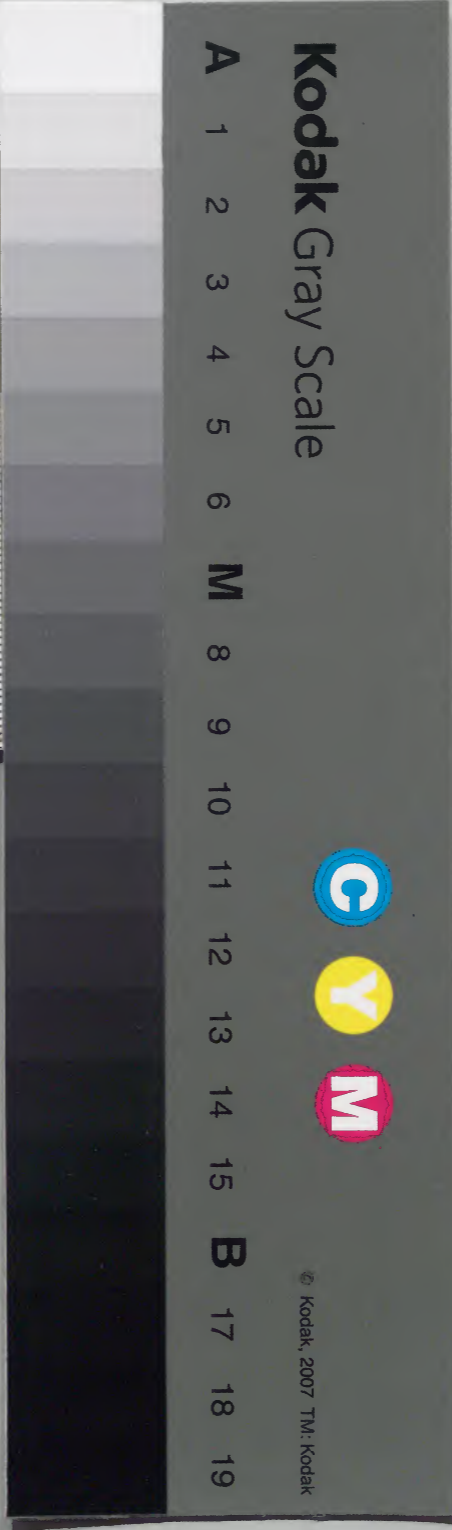
草板集

印務		和書門	
二	五	〇	二
六	八	〇	二
四	三	〇	二
册	架	函	號

庫文閣内		和書	
〇	二	五	四
〇	二	五	四
八	四	〇	二
架	册	號	類

(三才)

内閣文庫	
番號	和 25402
册數	4 (3)
函號	201 607



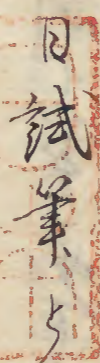


草根集

寶徳元年

和學講談所

正月朔日



試筆とて之首

漢草文庫

立書

今朝のまにあひさむはなれもはきき風

松鷲

松う枝みふとせれ枝と百み鳥とくえはきき風

社頭

神社我産此園の竹乃世と信よむれと也徳と志あり

同日係年此と也きく屋系利永耳り

行合カ松

いくらとを神を正しく下宿の事ふり合はれ松のむねの

返一

ふりてを花とともく交わす神は行合は松の事

二日小笠原備前入道浄元きつとせし

春うらぬ君うととものお松とみ世ははけとあかん

返一

あつたよ君ととものお松とみ世ははけとあかん

六日佐例し申めて島山修理次入道 賢良

此家めく 續ありに

山朝霞

いひふ日れりりあをあさう山けえ名はあか

尋徳

うらぬひぬとれお松とみ世ははけとあかん

寧神祝

今もこえ神代のまふりう人れお子事いんれあめて

十日枚原伊賀入道 淨信 此れとよりあかん

あかん

あかんはは省の梅うえこの事う君うととものお松とみ世ははけとあかん

近所、此中、行々、事ありて中々、
うら加急、色、
...

日、ま、
...

十六日、
...

早、
...

山、
...

去、
...

名、
...

寄、
...

衣、
...

泊、
...

志、
...

十八日、
...

松、
...

縁、
...

早、
...

々、
...

忌、
...

弓もやよの世もくくはも成て今もみも西なりせ

浦松

云れよのねうりよ此山も由こ成んよおの浦松

神祇

あしりかれより神の国もまじりていそをりん

廿日息徳院とつよ寺よんくよりあひ

あ月次せしよ

梅花告書

云れよよ鳥わとに多やま枝よからん梅の親子

初風

あそく神の喜凡やりくはぬるおとろや貴川の派

歎冬

はしりく山の子よおれお海とむるわん水は歎冬

寄歎意

人よりと心よれてあひあはけつきにりう園とゆん

田里

是れ田と作らんよあれいそわ神の里おまねといまはに

廿日細川右馬頭入道

及貴

家此月次

七

庭梅春久

白ひの洞
梅うえは白ひの洞であれは
あはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれは

花盤 當丸

雨風もかわり年々は
あはれはあはれはあはれは

祈意

初瀬山おのれはあはれは
あはれはあはれはあはれは

初意 出和

あはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれは

廿五日三寶院准后一貫
門跡あはれはあはれは

初長祝

あはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれは

廿六日藤原利永以下十餘人
草庵あはれはあはれは

あはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれは

初春霞

あはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれは

顯源意

あはれはあはれはあはれは
あはれはあはれはあはれは

古寺鐘

朝りありありのまじり松ありて澄み若むと妙なり
二月四日東下総入道 寺新 家より続文續

山霞

朝りもよく霞はあがり大和鴻孫の基れむら山

春月鵬

くわく月とありありはるりていふまじりては先世

見憲

くまの都北西勢ありたり移れといは道はまのよれ

六日修理ありて家より月次ありしに

竹延年お

三月分

はるけ紫のわり敷とかけぬそて縁はるふ竹の川の氷

夕陽鴈

當夜

三月月と我を閉りくまはとこのむら比の鴈北列い

思麻

書そなき思はれまき回書やふむりてつる麻は書た

石西苔

山科北岩不ふくはるん苔とまきまけし人れ公のハ

六日妙乃寺日寶上人北坊より

山科北岩不ふくはるん苔とまきまけし人れ公のハ

次續文ありし中に

庭残雪

春日の宿の南にけりけりけり雪にさしあはれはるる

水邊歎冬

春のぬ水に心とくむむやうく冬めの山に

寄菅憲

人のかりやめは浦浪よるの昔原社を橋らん

野寺

いくまむまは夜とあふくそ枯竹比の野に古寺

社頭歌

世とわらわは成るにけりきりし神の社に并歌をん

七日三井寺に僧仲地院僧初長算に坊へ

は長始て海よりしにみ續文ありし中に

暮山霞

暮るぬ夕山にひらけしうきふりう契れあともん

稀逢憲

色らんと年れ之とせは新枕わらわふ和とわらふ人

薄苔淺

昔も雨も人を驚かす此後此曉乃初月は西に取の声
八日又傍の夕暮り

夕雪

雲より暮れ日影の寒ふ涼流れて山に夕暮り
名立窓

夕の入りぬ暮れ夕と夕の夕暮り
旅り夜

深山路をわたり夕暮り雲鳥は夜も別々夕暮り
十九日新羅大明神の御的此時系の人

夕の入りぬ暮れ夕と夕の夕暮り
く同雨を續けありし中に

澤来苔菜

三笠山雪消の澤より来たり苔菜と云ふ山にありて

寄風意

夕の入りぬ暮れ夕と夕の夕暮り

山嶺林猿叫

山嶺林の猿の叫び夕暮り

十日同坊乃月次

霞隔山

夕の入りぬ暮れ夕と夕の夕暮り

雲は浪からぬ松もあらしはは雲やふをたぬのほゆふ
の路梅

風とけしなゆれより梅もかたは人れ神まうあん
寄社祝

世もあれ一石は陰もあふや玉津社の物そろひゆく
柳 直虎

去らぬ柳のめまともうぬとて居るかうーけり
虫

あそりうなひくまふいんよかぬとほなまうまうの尻尻

十時雨

いへん時多朝は系水もあうくうまうのよんは

近慮

何とところへん固れは葉のたをきや梅のたき開き

何

世の人た物やかたうけり川もよれ水あいわそ絶す

十八日小笠原佐前入道 浄元の家を月夜あり

物春祝

顔もみる新葉のめ眉をけり系もよんまうあう

早雲抄 南苑

初瀬川水なるはて岩舟の如く人後よたふまをれ

燐夕

蒼々まれば秋の思ひは秋野山守神の姿とては

橋落葉

橋柱より錦木此のいとて落葉ようとて冬は山ひめ

山家焼

烟よりぬそよひ浅石山傳てまむ世とては里人

十九日無折言法師の草庵をて友原利永

今こそや一月次母

春夕月

中にてそあまやのわむ月乃多とてかむ夕風

山長曙

暮あけぬ山といありぬ名流て候むほくこゆる暁

名所松

和の浦北雲乃とれとあけう一昔たつたれて又増む出

袖長門 南苑

和やこむきまや雪まじ松よきて風物まはりにけし

野堂

草の生るる野堂に火の中人の影は志あるを知らん

暮秋雨

暮るる時毎も秋は遠くも木葉はてやうく人あらん

藤裏

玉のうぐいすの葉は宿をり世はたうさふさふ月をわらふ

寄月窓

月をうらよき月の影はた神木枯れしうらなげ

古寺

今も香の砂や寸人橋乃多まけり寺は清の袂より

廿一日隠波入道素球家廿月次小

梅久韻

いくちよえ梅は老かめうなる水はうらまにわらう白き

朝霞 首元

春のゆく煙もなほ釣糸かひやうとれ山をくもる

寄運庵

契しと方き運れを侍して誰う不のたうらうらん

寄琴窓

ふらふらと志しつゝふ琴のよとら興の程を河津

松上鶴

あゝ磯の山は白波も松の木の影の鶴の法を

廿二日妙法寺めてみ十首續ありし仲り

山霞

長や軒鸞の言程と志すひそは法席と柔くらん

落石

松をりつとよみぬをぬい言とやうけ長井山凡

祈窓

七日ひぬ神の瀧に河社ありゆえやあふ行らん

蕭寺

曇法に神ありして嶺高き夕に寺ふかす雲くれ

廿三日明栄寺と云不見く續ありし仲り

霞

雲埋む山に雲乃下凡よ暮日あはれの人れあき

残雲

月影る嶺に影けの夜多に別るあそや暮とけらん

水卵窓

遠く行く旅に本懐乃山は白浪の名はうらな人

相

一葉より蜂の嵐ふあつそく楯は骨やあまをばしらん

燈

清くぬるる乃日かりとみち斗鑿れ草系よゆら地

廿四日右馬頭の家乃月乃り

柳風

柳を吹ひみさる系すらみやうりかきや風の行らん

春の長毎

をかりやうらな月乃らよのあじを山

磯巖

糸めして知はぬとるきこから岩舟よゆら磯の白浪

春辰 苗花

春にやなまらうらな冬にりのあまをわぬ花乃陰を

長牛

夕月若長花飛くひのりいとたは世を捨てそらる長い

長祝

徳人長長のりめはとふたよりまらるる長代の年を

廿六日東下総入道素所家より鎌倉へ申す

朝記

おぬすとのふやせ人相あり此後其いわりた花の風

別意

しつらふ海かたぬよあく此後叔源き月此やうよ

浦寫

霜とぬ浦共候ゆいづくたしきさる露此月の毛衣

廿八日藤原利永すやう月次り

夕暮ぬ

ゆらなり又山より霞けけうきあゆよりくろ西う字

山花送

まことむし花みさらて吾もわづはまの花と岩の橋戸

名不海

仙人たうき人竹やかおんまのしる此海のわまはくを

海上霞

南見

まの海霞とあぬ鳥とわづいぬはまよりと浪よん乾

夏孝信

夏孝信之けとそこいしむ物と雲のそも浪が松らん

江月

蜂共霜切や下りて朽ぬる今も白く水空より月影

別意

衣く此人よおどろて危うなる袖と御らみら共此處

名所橋

秘そなればしあふ此橋古にそれも昔や人傳もん

二月二日一色た京の文 敬家 家小倉所

作庭なるとして海をく流るく海あり

さいりし次備をありしに

春水

さそる心海津も此 関の戸も初るる浪共春の神也

脚端

岩とつし

道の入此石もけし 紅みあつめき日え流りいよ人

逸爰意

あふとる心春もくはとえそまらぬ意よらん春とくは竹

定竹

竹のよれ春もくはとるにく人んく記傳する意は是下

三日在馬頭家の月夜あり

花西歌

笑もふらふら山也懐ひく人よ此様乃らうもい西歌

田雲雀

近原よりあましめ野田其草の原むるも床とさふひしり

鞆中意

か倉り見ら思ひと願よせく雲はほむ花をさそり夕秀

花慰光

有光

玉中り花舟田中やほあそもあまにをのさうもあらん

寄お願意

夢もなや雲はゆより様も何らひも世よりうららん

不審

寄あまを

七千はあまよりんらあまを神有りたうらひりあまらん

六日浪川に吾清依あ後乃亭よりて

くくめえ續交よりうら中み

見也

尋もてあまをさのくあむひらうあ代は庵ぬあもあま

寄花意

こ夜衣を穿りあぬや紅のう次也海に整りあらん

十日修理太史乃家月次り

山路雑

梓弓山橋より我るぬとりりきそとていきく次る

善春月

天の曉出り月の舟是れはえれとていされくもつれ

垣屋畑

垣電此畑は名のこいけはよあ道福やもかよひ流つ

朽巻

石の流流とよのきよもれにえとてや巻の流もあは

松間花

松のむしりかむかぬ松りぬとのまといを初は流す

山家花

はよりぬこの山里れんをくろくせきとれ花の一あま

十三日隠岐入道素球はく光一 月次り

夕花

くまのてむし山風も香とて花やそぬ入念の声

何蜂

花のよはし蜂のうらかとも文はるにぬ。あつりハ

遠村

宿也これよりくを北行の上より進むわたり道標をそま

落梅浮水氷 苗瓦

山も雪も水もあふりし女梅はるふらに茶根ゆきん

岸藤

谷北松の宿よりいふ高根は春の夜の如きえ

理侍恋

宿人ともいふはけふあはれは夕に降とさふふり

立名魚

恋するぬ道とさるふりかづり此我なきはなうらな

思松

秋あけの山とさるふりいふ人北よりいふぬ思北松とを

十六日佛地院御部長の善坊月夜り

遠見落草

花もさきさきみはくつたの系子切する宿并一村

深山残雪

緑もさきさきと苔は深山の如き谷よりゆき鳥

海邊夕雲

夕のともるにそのあまはまて衣柄ゆきとてかきか

春暁雲 苗花

わかたけ花うく嶺の横雲よまかしくて月影みま

春夜早

夕、
こぼりあつ早花光いなる法て霞のこせりぬすめりつ

春暁意

ふけりた下りし海子思ふまゝあつこゝろあやまり人

春述懐

とらふれり世にむらりあはとよせあつぬほしほる人

十七日平松買しつめ續あれ中に

都霞

世のまことなりや雲と君はあはれおもひひりし人

神意

わをたけさうみし雲と世にあらはれん今もあつて

鴻松

唐とまぐらん程や生さるんと此系なる蜂津海雲

十八日大膳左吏乃家此月次り

花取見

鴻雲

山をりけし花のるる世の雲にけりれと翫ん此の山凡
夕日轉

寺の田

山をりけし夕の鐘も霞はて寺のあ田は川
寄湊意

まゝらまぬうに孫と夏に流川名はゆと彼の下よせが

竹裏寫

多るくも雲はうらみ急をせ寫りりその村竹

祀慰老

我老の老とるくこの海をうと神よりくおの辰

後後意

とくけかきりふれ雲つともかきて契はほをみまき

洞玄

松うえみ雲とかりぬて陰うきとれ谷乃多の一都

或人陶淵明かきと家庭小讚とこハ

まじりみかきつけ伝方

陶淵明

竹の系れ家とけりてや海草れ花をふるも秋の盈
廿二日曉理ち更れ家とて續ちありし

安遠集

海山と云ふ所はくまにわたりてぬいぐるかたのそとに

残巻抄

とくはるはるは山の間もや妙なる梅はあくる乃下院

賢昇意

物志不とこのめはは浦凡水吹なむとを海へ入る

寄山懐舊

尋へも昔こそわ達我身世よりは山里知人のか

自廿三日夕夜吾神希又糸糸その月詠

百首初寄在別紙同廿六日泉場より

今かゝ人と感とひて五十首のはは成てそ

まうりし申よ

袖去霞

四そり山へ霞とくちまへも衣やう決き去れぬの葉

八月雨

八月雨は入はれ川の尻とぼくろくぬぬるなれよ

麻原霧

霧をせ次月もいと地へは麻原の霧に書を為さる

冬曉山

何れも元山此月の五明よりぬきれりる

近書意

此の事ぬきればは城のむすひめもとぬきとか

蕪申朝

松ヶけれ残のかりととゆけの物徳むひの

廿七日量阿といふ者廿首れは来せし

百首録といふ後多くて一首結録せし

月前帰序

入とんるう張月とわらうの序や後よ名と徳しん

三月五日自伝吾泉増り下て小庄あり

人此家ありし南庄念佛者と云寺

成就院僧却信海きうとくより

申されし海より下次續ありし中

首夏

卯月いみ 久しうは卯月れいといふとと

遠慮

あふとそくきぬれ^{不審}五月の文元此

海村

人志きく哀れをいひて朝夕たうくはしと何ともん
之日わう人百首は楽せし坤よ

立春凡

お記出て世の考きけのときやわぬれ公よ長あの人

山家花

奥山花をの錦れくき夜にみろくもぬ長れは

橋雲

梅抱朽て管とるくはみ程申結そとふわうし

古御衣

黒いわきぬ衣の昔れ秋もそとれなるまこし御衣

古辰月

やうに猿鳥あひうらりりみわきてそ月れ光く

千鳥

舟人にも真よぬる衣れ管のうらよとる辰初めを唱

寄置窓

あのか衣いそれを夜れ衣の景くお凡のこ運福つん

寄中庭

草中れ鋼代とさうぬひと虫れ命しよりううや

古寺墮

小初瀬やおのれおのむくも 養育のくみりおの
五日或人又百首此法楽せし申よ

年内立書

冬よりおのれとりてくまの雲や年此中隔らん

寄露花

冬も香も山の雲よむしりきき花のし紐

納涼

山あきき岩ほそいしおの松の枝よりき神をく下氷

深山麻

冬も香も山は苔のさきとさき花よふやと鳴ん

江月

さ萩涼き水系うとれ秋の雲むとく月とたつゆら

寒うなま

秋くし麻の花つまかとりておのれ志くむ冬は萩原

見憲

思ひりふんふれとくとく人母なり秋みかりていよおのれ

名可露

友馬其志ふ斗此に成はる道老てふふの境内に有る

釋教

維多三世の仙とそぬるふされたりて此はよそく法

六日念佛寺成就院ありて愚も悟り

可く續ふふ

夏月易明

尾原程もなれぬ後に行はれ此橋はあつて月影

夕立雲

とくりく月より名記夕立よやうとあらはれてさうく雲が

曉憲

衣く此袖ももふのまにたりて人此強さぬ月乃形も

旅泊重取

貴取ふととまらぬ毎えとひ風なることと云ふ神の流る

七日長海といふ念佛寺此寺僧乃坊あり

續ふふと申よ

霞

是日よ記雲并れありとせり川の要よ海きりけり

檣薰枕

橋ららき若木そくぬ世の物やみきい昔知らん

翠愛約意

漱とてはふれとて人流き本たつくと浪よきもの

鞆中山風

宿あふれ初とてむくく此嵐も月ととくふらよ

八日よ又或人諸神はよくく百首詩よ

三十一申り

初雲

緑ふ松も子代とて限なき霞そまにみいらふれぬ

花

おれあもなとて此世よといふらんやよ月日花とそらん

五月雨

漆
流川ちりひ埜みら流中ぬ満まん海ころふ月毎れあ

萩

山路竹萩の葉凡いはくありても方りりれれ神よよまる

月

川
輝の月あのみ衣そぬれ海とて秋も穢れ川原らり

落葉

涼山風涼くいしく冬はるふ葉も落てる声
不遠意

人之人我も物も存せよこれ人の心さういひみよ
懐舊

昔よりまじしうひよしうき老るるを記道この
十日の為人は家を續けよと申す

鶴舟廻鳴

篝火も二乃物舟うり別道のうりあまたの川鳴

逢存増意

あまのえよわい海川乃わら海り水也きも冬も涼きよの地

夕陽映鴻

浪れ上の夕れ冬よるまてそり影もたう記無津鳴山

十一日又或人誦神は楽とて古首よみ

一申す

立春

天原わらぬ岩よの園あそびまじり賑わす春や三あ人

長月朧

長月よの神を勝れ志水せく老乃波やしの原れ月

郭公端

時鳥けり一交軍也よきうはく何き勢けり

庭萩

夕月苦昔今庭北石う地留る風を萩よ好らる

黒袴衣

風わ吹る人やうひもわぬ萩衣秋のさ衣

松雪

雪かふし時上るうそる連雲を白く雲のそらか

寄鳥意

よとらん我を契ふ鳥けりう海よを別てやう

萩西

海雨よそこ此公よ友いん風わも昔れくも西萩

十三日又或人のゆはめく如院とり

坊あそ三首れあよらん

善山卯花

夏よそとくう交なき卯花よ今もわをさく山の橋と

夏後郭公

時鳥をけりうそるあつるうれ夏ちふく急やらん

寒单

中れ急なれむの秋れ後しこころは海よふ雪ふ
雪となりぬとるふ山のれやうに神のるまれ後のころみ

十六日或人れきめあへく三首の奇よ

うし申り

林新樹

えそんぬれあへくか吹くつまを海に林よまのり

磯夏月

いしきうれりぬる磯の友れふんらくはる月と夏よ

庭上鶴

和方此浦よ月若る雪よふせれ友むきののう宿と松よひまぬ

海上晚霞 尚在

奥付浪雲れくそよゆまてよま(葉)れぬきのあまれさ衣

霧中水泊

ゆる奥よ焼たどこをよんとはりそるい音れ奥の浦人

袖冬落葉

袖冬月秋のまれ秋とあふふや叶ぬ先よ木葉あひん

北の離意

雲をよみ去る竹の影はさうらの鳥はさうらの鳥か

推後日言

雲乃より入るはくさの海をりきたぬひりに海山

山早夏

友いもをさ山をとりんをささうりたなうくさの山

家系意

清くふ神やうり糸さうりいぬまのさまうりてん

瀬上島

山川七瀬より流るる水は清くまをりてん

廿三日或人伝吉玉津嶋あ神は清く

百首よりみし中丹

暁之春

さ萩ふく嶺よりあつまる雲は暁星は清く

秋花

秋ありたりうり糸の山橋をりぬさす雲の一

樹陰照村

藤の毛もぬさす夏は草にさせりてん

未落花

まを志りしやうの如き如月のあけりし花はよき

倉葛蒲

花も咲因し朝きの梅もさうやわめれあひひるん

堤上霧

鷺やゆり古江に堤旁こめて柳さぐぬ吾れむす

寒夜月

乃し夢をさけし月海に雲よ月忘まぬ神の光とくふ

寄車窓

まよふの月花の影まをやりぬ車はひさしと響て

田家書

人は海ぬかりふこりぬて石さむ田家并みそなうきり

上陽人

半草よ一葉みなるかきうぬ窓のひく地毎よかき

廿七日飯前入道浄元京よりとくれ

返一

の合れまことなりぬ神垣や君とけひくぬ花のさ

返一

秋と秋をひくまのさうぬれん斗れり向きて
一首さくはつりし物なり

初めを習ひや出り人よにさきありゆれぬみそは

廿九日或人れある度めくあ神は楽れ百

首わたりし母先一首れ懐きあり

庭松緑滋

はるるぬのかきんく庭は春のそも緑れきやみまれ河割

立妻

尚危百そ

春にさし浪れかうははるるきき案城聖やそらん

花肖速速

志多めや何きく日教と先そむむよとそむ花のこぞ

晚夏

六月れは秋よりき山川の流れるう静やうそそ浪

幸村秋夕

山越てあやも秋よかうらん尼ぬ里人れ秋もる夕暮

水卿紅葉

水卿の紅葉あまぬきやれわ流り別るそこの河風

冬他雪

冬に池乃を其の朽葉も雪に交りていそまぬ哉や再ん
春意

多舟を心算とやうきくむふくまはるるを花の霞
秋意

うけ子うも鳴き流うう扇をわうわひはるるぬ花の秋意

名所述懐

いづえ原七とせ成て楠木の子枝もあふれ杜の雪の
五月四日狩場り傳く永福寺やうい
道場めて福松丸帳り此百首あり

先三首懐紙舟

蒼菖蒲

祢とかけよとや新塔の山鳥はさうとと長ねわやうさう

河内月毎

水はあふういよと川の天河星は彩る此六月毎は雲

松為友

ちりせぬとれもつけなとて年改ふる本は松の若松

初春霞

南苑百首

是日天正天候より嵐そらう雲は神とわう

折花

翠あきやうとまろ枝はゆりて秋あよとく花は下細

里堂

秋よまたうらやわりしうらよ此里よかれはとふ堂を

夜萩

涼きよの秋よみえり萩あやそ急ふも雲と月を照し

冬月

いづらん^氷湯るれ元はかゝるて秋そ月よぬまゆ

曉千鳥

かよひあくち鳥と秋りあふ下うたは河原あまの乃月

寄煖窓

をいれ煙とゆり人夕暮も風吹きよそ人よあつらま

若存懐舊

若れうよかきし年と去るぬまて若うそぬまに古はな

端午日或人續安よし申す

菱風

風よけいほひて神よかすむおちれあやも白よりなる

夏藤

うちをひくも如き子少夜泉も園に入と照は友也

友牛

やれむも苦ふも花もひく牛此はまの小事も花も水

六日澄心庵とりふ可めく或人真行也

續方乃申る

螢火入簾

中はくふ此簾はひまふく形見はあまわり螢も

寄雲別恋

我誠願は別る横雲は神はかびと形やあま

古寺水

嶺言を忘る記わりの水落て志きまはみ流れ白い

八日永泉庵とりふ可めく或人此法乐

也一續方此申る

河外老

川上此滝の白沫をれそそ吾をわろふ岸此卯老

妻恋

宿るく琴とこれに猶書は日りのまは神の上れ

夕鐘

任人此夜のちて墨海に多とるひら夕暮れ後

九日因唐由て續之ありし中よ

幸山胡夜

尺くちりし雲のさるあまうの物もあつる喜れと心

古郷秋月

任人とてそそくさむ月此中の歌人さぬ輝れ古

晚風催意

我の心はくむる風れあよりたに形もあゆめ夕暮れに

善林鳥宿

山陰や竹此林よ鳴鳩れ舞斗すか中よそ暮れ毎

十一日因下まそ人乃まくめ依續之此中より

月前梅

去津風ひらりも色と吹分は梅の匂ひみかむよの月

姪時雨

山陰ゆく社の時毎みゆりなりて本意と海ぬ輝れ雲を

池鷺

ゆらゆら車りの枕むそりまそあちや海よふ池れ鷺を

芳溪茅窓

玉の松

心なきや契^{芽カ}秋子次郎とわらひたる山の嵐

伝吉

契とわん今秋はゆきさへ入らぬ此すみよし此去

南寺西坊とふふふく藤原友規と

いひく若きよりみまかり侍る追善

とそ續き人共はよめ侍る仲よ

早春

ゆき年々梅のほらと逢ふり神行も此流るるは

落巻

ゆき年々梅のほらと逢ふり神行も此流るるは

恨意

をれとわらひ人月をよきふむりはよ梅の恨意

野寺

さあよまるとり神人のまけけきくらん清井曉の夢

十九日成人見永彦とふふふく三首

乃安合や一母

橘薫袖

ゆき年々梅のほらと逢ふり神行も此流るるは

鶴川集

鶴川集の巻の二に記すに物言やこゝろをば此集のあらん

懇切意

本中と意のららぬる固とてうへはあゝとてあつ松也

廿日念佛寺此寺僧噴噴といふ

こゝろやー續きの中

竹亭夏来

夏来る本風の涼竹は庵乃其との竹の

牙別意

藤めれ道のをく竹のまを夜くよりも別成

田家見舊

妹のしかり穂のまやも同き人なり田家見舊

廿日わはらと海はくさあゝくわりーに

見永庵といふふめく之首は合せ

亦獨吟み依して名はあゝて出づ

月前堂苑

白妙此砂の月乃露の上は時そそふくお堂れ

竹路夏衣

わのき日此雲と衣に二重の山をゆきし人あなほ

菅林鳥宿

く種をうらを此林の及法て雲に志のまら鶴鳥此一村

廿五日泉場より海路中より又佐吉よ

海つりてまより申とておひはく

新より福ひもあらて種をふかより申とておはく

廿六日曰天王寺あり藤原家好百首

はくやし申り

立春

大伴此の日の白浪をやの霞とくけてを記候雲

春駒

約はんを是此御牧の野へみし雲此あとかく毛斗ん

郭公

橘乃ちるふあ種をたむさうきれまておは山郭公

夏月

志のいれ月影のくや交え此の麻乃さう此台き垣下

路簿

野へ此尾花清めそく事や夕暮るをたしん此神を迎へ

麻のとから

かり申

嶺月

名をみ山い海北わるる月北あゆむ

暮娘

秋ゆい徳とあまふと暮も事となく

井少

万代と名井の水とより火と法と

炭竈

名れうらみ炭たぐ物曉れ平も横山あり

初意

あよりきこみ焼火れあそらき

怨恋

若くそ浪れ身よ入あまれあゆむ

お卿

あさくとも道れあそ人あまき

蕭寺

この寺れ七と云はる事とんはあ

六月六日山名弾正少弼教書家

月次

路印書

是るそ本下石をえとくく多し花よ印杖と名くは

浦夏月

明ぬく浦中里の如かりたよ霞もあぬ浪の上の月

契久志

昔の世もかくも契つわさちふれ家清らりる名とえとく

早夏

白丸

いづれもぬくらぬの葉れかどふあはれよまはれをえん

家昔思

我心をなれしそや而進ゆく昔思くくは家と多ん

雨中懐舊

西きうたはぬに世れ方とと西歌くく一國の秋よ

十一日藤原利永ころとや一月次よ

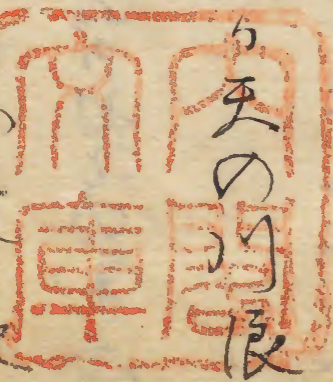
夕立

今これいそぎ橋の夕立や虹うら返り天の月夜

夏月涼

衣衣吹野へ乃さ夜風よ月と袖うのちれ白辰

路昔



有りぬり後十方よあそと一併の入り芝の心草
後卯也 南苑

卯抄のさけ五侯海とありとそ境のふくやそよの和

園首蒲

園ありそわめゆ井えそ知ぬ長記後(経)此也

夏題意

飛雲あり岩に也けつりの神とさきもあきしる記と

閑居夏

志のくちも身とりらあそ境あよりつれ松乃下庭

夏述懐

かうあそとらひはせ(ひ)せめあむかひのこはむ(ひ)な

十三日隠夜入道系球さうしやー月夕り

夏歌

美成篇を本下い舞をうらけ疎き庭れり若

松下水

深山りれ春のぬり流出るいさく小河もなれあそ

朝市

茶此原市をふきそとりの民母船あゆみのくれ旅人

廿七日鴨子之基こころ續ふれ仲り

夏風

ゆるひえぬまひの終りよるな月の風れ姿とちれ云れん

夏河

いづみさ^{さび}い^{さび}清涼まどまら麻のこころぬ河端とまらみ

夏衣

清てしれ身まどとく水れあひ斗あうと物^の袖

七月七日仙池流僧都長集れ坊みえ

七十首の續ふありし仲り

初燠

庭を西の汀ぬまれうぬは相れ一葉の母えうりう

七夕別

仙人れ身^の竹乃庭まや星のま乃^の杖^の末^の告^の人

河月

月夜より星も遠くそ河内女れまむくせよ玉れ河長

宗星意

せめて人むふく心の城も遠よの星れ新やうりう

宗玉意

う秋いとて清き心うせれ海はひろくぬ玉れかほる秋

田家鳥

はるうりつる道原やわらわくあまふり門田のわらわ村を

霧中河

こころもくさるる心あるひのさや旅人れ櫛川の橋

心同七夕日た系たまれ家より顔と道利

よむ一三并存より詠一高早朝

はるうりつる

七夕雲

ワ浪小星れなるとと尋ねもむよあぬれ川上れ雲

小鷹狩

はるあーやかりその風乃萩れえよんとつまぬ小鳥斗

小邊草

露もたにやまてなきぬいあ代さう杉神わよ草れ下水

寄秋山窓

かりあやの架てはしきかりの煙ふあふ坂れ心乃下柴

妹山館

秋山まきふのろりぬ本葉ちり嵐よ朝の杉をきく

穉鴻鶴

ゆふけ浦の鶴もたのしくはかきまぬ秋はあはれ
九日山名老那が浦教へ家よりしる
月次やうれし

袖秋月

妹こそはあまのこころは秋月よあはれ

外山麻

はまごひのお山麻やあはれ

家世祝

ゆふけりて華原は世のあはれ

早秋

南无

あはれとあはれとあはれとあはれ

松菖

松のまはれのあはれ

同窓

あはれとあはれとあはれとあはれ

暁雞

相好やゆふ梢は鳥の毛も白き

十一日或下此月次

袖煉萩

明如く風あり其萩るるるやう秋の萩さうし

深兼虫

人方るとういふ人煉の虫のうらうらうさう

寄船窓

よりええおほてとるちあれゆらうあまの神の漆り

煉夕

るるるの神のあまのうらうらう人々さうら

獨惜月

いねるる萩れとあまのうらうらうに独わらう

寄菘意

るるらうけぬれぬの菘代かあ家の衣はう人のうらう

隣里誰

るらうらう鳥れねるるやうあまのうらうらう

十八日大膳土吏乃家の月次

甲煉

白あまの扇をさうとあまのうらうらう

秋田

秋田田のりき此海ありるおゆてわらう思はるはのほそゆん

鴻松

いふ事しつ川忠知とつらな流強う松を久しと奥津流の

秋月 南流

長松と送り控そやの東のゆきうゆる月とまうん

殊逢意

なとつ川りしひとまうかぬもるらう月此夜夜の光

秋園

さふさの花も白りた鳥のわた昔よりうら園此夜凡

十九日沈理たま家ぬく續言ありし日

江蘇

蕨原や古江とあきて秋花のよまて好まぬ不流とそ次

海邊月

さふさのあまれさるは煙さ之程を夜月本ゆきう

尋意

思ふとまうしひ出ぬむくぬけう入たやよらうふ松を

山吹滝

こりくたろ嶺北林の夕日暮はき出尻濤子鳥を筑し

廿三日た系と史家北月夜り

新秋毎

青うろろ海之落て一葉ふたまきりうらぬ相北朝と

萩映妙

咲蘇のみるらほそつ暮とんて産もつとをかろ河浪

名所寫

和の浦や志の小隠てつるのわはまよと誰よりるん

早涼色 南彦

秋と知風のわろと今をかすこるれぬの松の下迄

驛路霧

旁海ら山がたつたはる川半瀬ふそりあ北驛路

寄黙庵

のし福こ 福とえ鳴るまうと知ぬのし福こ北経後とろろ中の撃子

白鳥汀立

もや川を汀丹浪をかろさた鶴鳥北福よりけ多そとらぬ

右山猿叫

本れ石りら月よあさく奥山北境の志屋よ猿叫聲

廿六日 彈正少弼乃家此月迄り

早姪

早より

凡我つらと遠とありの山凡と一とえとてつれあひの事

取虫

長也とわたりとゆもつ虫は公とて其の世にけあふ

嶺松

松とて毎と根心と書とてふけりわさひあつ勝は

早涼也 南丸

袖はし定まれば此の姓乃と凡とんとわたりてやう

五葉處

的房れとそふと村五葉松はけつとてなれ山らる

尋弊魚

契建初りそあふぬ宿もつ川流たなれ原の下宿

立名意

めにかつと雲は浪るにの生えとるものつその事建人

善林鳥宿

福もきしとて林とつ鳥のあましゆはし若えとつり

廿九日 隠波入道素球家の月迄り

名不為

和の浦よりきりしとらし梅の露踏むる露世の毛衣

夕開萩 菊元

とらきとらきよみゆそと神おまぬう宿志ぬ秋の夕衣

家秋別恵

ゆききり人本多も秋も時多は神の別れ去りの道

妹旅り

あふ人にかつる母んごう斗やそかくぬ此人此朝多

六日下都宗頼こころせし續ちあは申し

曉立秋

別つる時といふと妹のさぬそれ長月のしづし眼

橋邊草

山川やあはれ浪よ子よとせけ等候存れ秋のうれ橋

家早意

よの心もと共よめはあふ宿志はんそとら人かそりけ

家秋意

あそび多しそと捨へき唐丸虎少のれをちちあはれ

古後船

淺所深やとこに深き人此日のまゝや奥津鴻山
八日山名在東門 依勝豊らう 名く系命
セーよ御上續文らうまうしー中よ

初秋朝

山はく姓やうらうらのやうにたひらうとゆる風を涼ふ
不遠意

名所松

いふときを成命とさうらわらうとえ世をばふあ
なからあうかひもわらうとわらうの浦よせわらう松は松よばふ

は家故中勢太捕照貴知をばしとてかくあり

同日弾正少弼乃家の月次丹

名小月

め右る月小里人うら出て秋は浅凡ひぬ秋のな

小鷹狩

あふの野へ此の季の花鳥又色をうかり衣れ

寄風意

人ふは秋のうらやれあはうとみわらゆる船のをうらうつ

裁裁

当元

志萩

水室より萩やうきん却の色は雲霞にさる庭は萩
かの庭はさうくさける萩はわらう

曉麻

萩をそなく曉麻よりうらめ事そ月も霞も麻の上を

畫窓

んそそ風はまじりたるひく鳥の聲はつばささく人共

中蔵松

岩のひさしく嶺の松乃陰はれわらう萩庭のまじり

九日飯前入道 浄元乃家の月夜より

風前馬

以乃野分れ庭は先おらてはひさ残うめ馬は一行

稿對月

たそよりみかりはそはる人よそ月とさうれ麻をさる

名所書

大波れ松より風袖を建ぬはくもあぬ名のまきえ

初秋 苗夜

んんそらやまや萩はらまきとさひらひる麻を

萩窓

遠樹雜

鳥林巻の巻記其の巻とりのりくそいばり此月夜

樵吏帰

はききんちまこいぬ日山山人此の巻の巻の巻

十五東乃系之更 教親 家ゆく百首あ

ア

臥待月

子草之此此此此此此此此此此此此此此此此

此此此此此此此此此此此此此此此此

谷之草此此此此此此此此此此此此此此此此

中月

此此此此此此此此此此此此此此此此

竹間月

此此此此此此此此此此此此此此此此

月茶鶴

此此此此此此此此此此此此此此此此

寄月園意

此此此此此此此此此此此此此此此此

寄月忌遠

己の事(の)をきりぬりぬる人我(我)秋の月(月)はけま

寄月田庄

月(月)を又(又)よりき内(内)りやと(と)今(今)秋(秋)の(の)年(年)を(を)う(う)らん

寄月眺を

海(海)山(山)を越(越)す月(月)は(は)あ(あ)ら(ら)る(る)て(て)ん(ん)み(み)は(は)く(く)の(の)ら(ら)る(る)秋(秋)

十六日(十六日)共(共)部(部)が(が)浦(浦)乃(乃)家(家)の(の)月(月)吹(吹)る(る)

霧中馬来

霧(霧)う(う)る(る)ま(ま)は(は)あ(あ)ら(ら)る(る)山(山)は(は)あ(あ)ら(ら)る(る)を(を)居(居)る(る)え(え)也(也)

深夜雨月

秋(秋)は(は)あ(あ)ら(ら)る(る)風(風)と(と)雪(雪)を(を)ぬ(ぬ)さ(さ)秋(秋)あ(あ)ら(ら)る(る)月(月)は(は)あ(あ)ら(ら)る(る)也(也)

始尋源意

為(為)る(る)系(系)山(山)ら(ら)れ(れ)云(云)と(と)い(い)ふ(ふ)ぬ(ぬ)ゆ(ゆ)り(り)は(は)は(は)花(花)の(の)あ(あ)ら(ら)る(る)け

砌下萩

苗(苗)元(元)

海(海)う(う)る(る)り(り)か(か)ら(ら)る(る)萩(萩)は(は)あ(あ)ら(ら)る(る)松(松)は(は)あ(あ)ら(ら)る(る)浪(浪)を(を)う(う)らん

寄序意

さ(さ)ら(ら)ぬ(ぬ)そ(そ)は(は)宿(宿)の(の)し(し)造(造)我(我)は(は)あ(あ)ら(ら)る(る)と(と)あ(あ)ら(ら)る(る)也(也)

水郷鷺

河原やきりくしのりくぬいよのまねるうきをききわ

松川筏

舟めそゝ系松山川のくぢらみせをに代の本位世を

十八日辰園東下向の御くこより五所の

御影くく文一首讀りかおくとう

けくぬり家次あまの敷のくらし進發

わたくまきなれに屋ぐくあとかさばん

あまのやういあ

梅の香のさら吹かす旅言て君とまのり此種をい

廿日恩徳院へいふ寺めてくくあま

いんげん月夜

松下菴

菴野よりあふくぬみ枕れ下もふくはねてさうく

有明月

朝あもむれき秋のす美月もゆて彩やあかん

岩倉愚草

あつた朝もわらぬ花ぬきいあふくぬきあを枯ら

新秋雨 首尾

雲うらふ初秋風よ降ぬれはくまはれも秋の夜
松下接衣

秋の風あせくもかたし松陰北山母の侍もく山衣も
寄沼繩窓

んそい文かきと珠。孫ぬるりのうたよわぬ秋月集
降后言帰

岩のゆるぎ昔此衣の夢に泣き夕暮いとふ山のこぼし
廿二日修理をまじ家あくる續あり

雨夜萩

妹はうて親もよ新糸ふのぬれ風は海まで音の神も
幽栢月

葛女風

音のれぬいあう道うらうかむ昔れをうらう川の山風
逢着意

思ひ出ぬ逢取れ着の仲あり衣は体ははくしては
山寺滝

むらさきの

うらぬのむらさきの寺なるよはきん新やう治れ眼
廿三日左京東本家月の夜

夕虫

月あかり夕暮とぬねの夜草をぬかすはれ者か

江月

船とまら岩うねとそころろ入江の境よりかき月か

蕙飯

月あかりはきぬ飯のころ川神をあらう衣を心

野徑月

とそはあもよふとふはきぬ中をうそふ月をあらう

新遊意

袖ぬ山我夕ふまは清浄のよとふはきぬ衣の巻

磯浪

真津川わく磯なる川境よ又衣のころ松の木の浪

楊述懐

ささひをく我夕ふまは清浄のよとふはきぬ衣の巻

廿九日佛地院僧部一長集の坊月

ひかり

初鴈来

船人た浪子唐櫓成とめをみくう鳥あき浦の釣場

月前松風

山あらしの雨は色とりなりなうう月とそみる朝雲の梳

別後意

二ふの必おもあるれき出て別ううい後よ別きん

妹夕思

南庄

雲風もなきとけ家ゆゑ道はありれ梅の夕言

蕭寺月

はとむり山松風も吹目れ急まき海地月あはれゆ

帰意

あうね栱の戸いけう黒髪とこれといふさあ西け

雞告曉

鳥いふたにんらき曉とけうらまのしやんそや

九月四日因信乃月次ふ

夕鷄

妹れ柔むよりん草いふと鷄衣わりれ初夜終りん

暝旁

つらと

次之の浦よみはつらと繪と暎の葉乃香と海く岸か

龍水

若ぬけら海北流の水とこころきぬるき岸の横雲

江畔馬飛

ふも程北のちりりも雨も厚くそ秋は回れぬいさ細江に

寒林天窓

足らふそそみりかりし秋窓はそふやわんそふやわん

焯古郷

入るそとかなん見とやいそいんあまみへ後北の里北秋

同兼同防れむくみ草唐作まうし可め

續安ありしし中り

山初曇

吹風も山成とさきく秋もさきぬ朝の葉かまら

被忘魚

遠とらふ後またそとの云はくかぬぬ松の下は海ひら

暎岸雲

月りりぬらぬ岸は横雲ふさぬ船白はぬえ梅ふ

六日彈正少弼の家は月次り

河旁

るり煙

明海川よあなはしの煙よりみ立ちふ秋をく

籬草句

波うねあよと日影も菊も紅丹白ふかうはあは白玉

野岩

あそふ妙人此下萩折客を暮らせういれき浪凡

草花満野

高九

よくあはれを海霧り一りともむは満りぬ妙人此秋をよ

寄秋日意

甚るる志のそ長月を日とてよあはれ妙人此秋をよ

九日醜瑚寺西南院僧正顯濟とよふ

院家北坊を後文よあはれ一由よ

重陽日

誰神もあまて白りんあそふくは健む華れあまの秋

顯意

名元川いふたんきん昔に垣来るしゆあそふくは

古寺夕

とり火もあまれ日なりと軒垣を寄ふす秋を夕暮の心

あまのこころ

十七日 京都 補乃家の月以り

妹 函

あそらに時ぬぬ比の秋のぬそむら夕れそこのん

暁 葛

序島の松れ音まの西影よ如くぬくそ葉の月の下凡

海路

ふわりとんてそそぬら京雲の念ふ末の事らよ

落 家

ころ秋と定りそ落いそぬれまぬぬ他の家そかれり

江 残 月

月影入江のそ鳥よそぬそそはくこの園あそこの

尋 在 下 窓

かおそつら松のそ台れ月ふそに志す原とそ母のそれ宿

常 山 鏡 姿

山のぬえそれつらぬ母あそそぬ鏡や夕とそそいぬん

古 寺 河

川上れ山のそそやありぬそそ多置とほの水はまのそん

廿日 慈徳院乃月以り

少 五 四 五

黄葉

悔を思ふにかな花さくえられぬの山は秋葉のまじひよ

悔霜

秋の経ぬ秋も如きの初霜みさひしはららるるにせらるるは

蕙造

志すやや云れよのてさふとらぬる秋をほれ蕙造を

初秋 菊

山かけをわきまといそふ秋もあひてわりまかりつゆ如ん

菊

悔山の庵やとりは徳もきえなうく別遣つ雨よ如ん

悔曉意

かけよれ秋分とうちとみさ月なわらなるよのむ曉の光

雨

茶は庵りりつらむも秋大(日)つとつらぬれがのきく世と

廿二日石系支乃家れ月夜り

接衣到曉

身とさるをさけらぬるの夜よひなき所は(曉)の夢

石系深

立田娘からふ松たうと思ひいふなり及み深海さうん

旅人後指

旅人さうりまうりあもさうりたのり物あまの

妹凡 尚元

思ふまふむむりもさるは秋の風はうらさるる

秋寺

妹花成りたのりまよおししわうらうらうらう

秋柏

新そんぬ風は夕小あうほあまのてりあまの

妹翠

かほるは次把れとをえ秋凡のさうらそ松あま

廿四り明栄寺あて へく 續文あうん

しん 申り

菖蒲画解

伝る秋は秋とまをまかりぬよりあわられて虫恨らん

妹恨後意

只とくまはとらうら母は梳とて香あけう妹のふん

妹瞻原

春のさう草葉あめりき秋の
人あふさぬ蜂の綿を
廿六日大膳さま家此月迄り

寒遅虫吟

雲農者も庭草りもかきさびよる時の月此露の下
寄 露子葉

野亭同流

うし出んる秋とや秋葉は陰こころ海山のまぢ
此凡秋の草葉吹まよふ夕に遠色かろく
姪 儀芽

寄 是 意

道もなき浅草うきこい秋は石お路ひくふぬつた後
本あうそふん世よるよ秋とく思はれ松宿のきり
田家鳥

秋田うりわさや松あり此のうらふ人わらむる心彼處の
廿七日彼糸入道 浄元乃家の月次り

海鳥 寄

さう海は秋の秋は秋とよみ寄はる海の物ゆらん
野 草 歌 枯

野へは鹿をくねえ松の葉を食みたるの葉は恨ま
望媒意

二方ふ松のひびくはききと申すといふ君が

暮秋風 苗元

そと今秋と冬よのあひのせくらけりききと申す

暮秋菅

と記すは秋のさきとていふに思ふといひる

暮秋車

水車川やわけてゆく水車はゆく秋をそやう

暮秋懐

つぎてはとて冬はとるりかえ老り秋のやう

廿八日暮の屋敷人くききとていひ

續文よとていひ

連字霞

葉こめはくさるる霞はちりちりかき

河邊霧

雲垂れ海にうたはるる霧のなるる

名立意

いん水

蒼々々々我必いまこれたら水たなれよ世の御母やう

社頭林

かきくいの神のうんたおのふんぶくは枝よきやん

悔り修理なまの家めそ續てあわりー

蒼々々々

夕暮もれさのみわり燐もくみみくららぬき東の山

蒼々々々

とやれぬのせぬくは海と秋そけいあをそそぬき北の山

蒼々々々

めらりり年の極乃さかたに轉入を母わをきしや

十月五日或西あく續てあよん

中

初冬朝

ゆのほしきさのりらくは神音月故えさあ日の清影が

歳暮

く神とふ年とどれをけりくめよえまにんたふん

遠尋意

とくわか今取れ宿の松凡と吹はふつよまのきん

田家真

ぬきあから山田かりぬきあから子から里れ子のらあふ海ゆり越く

六日弾正少弼乃家の月ひり

初冬時雨

中さむく世さるて冬まぬと時毎よ昔よ四方此浮雲

落葉陋凡

なひをらみたり此れを冬らる事業や冬此去乃あ草

来不毎意

冬城うれち海の官有ととふ浪のとりとあふ源ゆり磯を

推葉 苗花

楓葉のら詠よりわれ推の葉の宮此あめら宮此山より

恨言意

色かぬ松のよのい葉さるうかきとぬぬく此れうれ

山家夏

いづくよりゆきふ虎の越正んらぬら春の暮れ下葉

八日傷糸入道 浄元 此家の月ひり

初冬夜

冬きそえかきあふ人らあはるとふ秋よりも初夜う川夢

推保嵐

細代の川をさといひ推保や本の嵐のうら此川浪

閑中焼

西影の焼く町をさえて予めし人此玉をそへんら

田邊寒草

南花

枯れを落とれい小山田はくろみ生さひちちの象

冬逢急

今来人のさけうとさよ衣神の跡と枯るうそく

冬夕海

夕暮の世成るる海はゆめをなす此町屋のしん

冬古寺

焼く事ぬきそあく入事そえんそぬ寺のありし

九日形や古桶の家の名月此月夜よ

時毎

冬やふ家婦とさうりし一更此町の雲とひるはほの時毎

落葉

嵐吹事家の雲れ巻の跡みかたをさちれ巻るる

新窓

貴船川彼の瀬乃ありきゆおちらぬぬれ此迄辰

江子鳥 高丸

これ境此今や入江此んと連し所を去て鳴子鳥を

家原意

こしと草のありておれまをけしとあちうあやめ海をわ

江船

ゆりきりぬ入江此夕人あつて藁と草の舟とのまら

十三日仁和寺花勝唐といふ下り

續ありきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

寒草霜

あうりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

園園カ燵火

あま海り園よこく此れ新りくとわこぬあふ光るは

家衣意

衣之伸みな見ぬかこりて此と月のうらみ横を

古寺鐘

任人あつりける事多とえあふん鐘よんとあひ

同十月八日越前入道日親とみり

法乐とてしきりし

乃路柳

柳子けゆきやまじしと猶送物きりしと詠み人

秋雪

雪ふよみ浪は塩凡そ此名を傳りてたけ松の白名

家歎意

やまめろふ次粒の美は神事んかろのるんはよふ

十五日細川大系在 勝元家より鷹

の百首此歌と雨空あやしり

うろくさ候所都不記号新作して

はかりし傳りし百首の中り

朝鷹将

新よりて知れし御入山の鷹はたふこの世此の系

将場歎

少民名をかりて思ひはるや今こそよき世はるる

鷹将衣

芥はめりかり衣きし方えりも世華はるる

家鷹意

想とやしく福ぬふありし人のねあつこの世あかぬとて

家畜多難

くく奪とくよ遠人君の為を世とて女やとやく足

廿日忠徳院乃月改了

曉天時ぬ

影のりくは明れ月よの連るさや時ぬよはちり此横雲

善山本枯

人毛山の雲もかゆる次本枯の山吹わく波敷の古道

晴後遠水

くくとりよき流りく末の世ふはる世はく世の河より

初冬

苗苑

冬いさえかきあふ出雲八重垣は秋法をけりの人

山色

天此戸の雲ふあつるやむの籠山は後かうけそむく

実常意

人ふあつるよ秋とかけ帯に海そあまた秋のくまを丹

眺屋

冬あつる秋と景と後ささえさきつ山吹りく初雪

ひり帯

廿一日或人雨の月次り

冬時由

雲乃より暮るるひく夕日といふ山をたぬ時由人

寒草露

わくひるく人そまゝある露消てぬまゝる時た冬草の色

河邊鳥

水乃川んやむの秋鳥之如ふをた後よはあそ

河邊寒草

秋乃の枯て露とく草うはな花乃流とくくさるる

洛陽雪

雪はくまれ友もえうふふの秋はその雪はのむ

俄変慮

鳥は照日とさあらしのるまを鳥はえむしをなりけ

お郷鳥

さとりるむれ魚さ初いそそあまけ川に鶴乃解

廿三日た糸た更の家月次り

冬月

あまそ何の水は情とあひあそく月の氷もみせみ

残馬

守女ふり雲の月七唱落て田中此松よと明乃月

海路

舟津風吹や浪方ぬ敷とく改め何れもきのめえぬと

時雨廻忌

苗丸

跡の雪とより一畠の松も成やそまひさそ時雨

年欲書

さやぬる月の左前ふしぬとくぬぬあ成くつ年欲

経年意

よきい我年欲(ま)まよこよと強うやぬ人(ま)まよ

閑居友

ふれけとそりやもいぬ^氷此松の嵐乃友とのこさは

廿九日佛地院僧却長集此坊の月

次り

たの落葉埋膚

ふりりや名さるる一柱石ふよ耳集やかくも及の此膚

河路時雨

日教うぬ山とそわふ人此志くまよぬまぬ神やん

残形見意

西風のこころぬ形をそ曇らさきこのう流る若はりきた

時雨

消らまふ時多といふ人後しは日影のそく雲共一村

夕集草

嶺よりき山のたくとやゆふ人みれをきたふとや

祈意

あひえのいよまんといひるこころ母神とまじ道はる路の

新中恒都

夏もゆけ於れ人の寝の移り園りり杉の風もかやう

十一月七日細川号部大捕物さくめしき

續奇り

初冬霜

本葉らり松み梅よりておん先わらう建むる冬や庭

惜別意

去りてきて月の入りのやまひるくまといさく様を

古寺跡

よきの海やこられまをみそりいふは信女まのつひ

明ぬと滝ともしきうんよく栗此八ひるけた音聲ね

新中夕雪

松の木のまん君の涙りまてかゝる山此下野

山家人稀

家やすらんをまく自れ甘味といひるは泣きぬ山を

朝木枯

まろり朝木の物泣くは涙かきこゝ宿のこころ

行舟意

舟のし神をきくは分れ名と云ひくはみんも川原

十曉夢

月和山のいけり曉の暁よりいひたまふのま

廿日慈徳院の月次り

沙末深

太山りやおれ下のさうあはさやうれもんや月次

雪夕残馬

馬の向田中れ竹の音りまおとらさうりく夕暮れ色

寄焼意

めあそとらおれまよかあお焼のえりりかえまおあひと

さしあ

時取易過 南元

わたりやむききうふ時取易過の雲はひまの跡をい

浦千島

旅跡きく人とも志く浪法見く心志く神子ぬる鳥が

家の舟窓

浪よりしわきみのいらあうやばるあふとる花

山館竹

唐志むらその竹系志あうて定やわうた上北山岸

竹系

廿一日大膳左史の家ゆく伊勢北法系

乃百そわりしゆ

早妻堂

妻きそし深山の松乃雪其唱雪さき(世)の梅う枝

松上藤

妻のふとけれゆとわう事そ松よりおつて山頂はあふと

郭云稀

郭云まきあう中北契ゆ(好)とまう(ま)か(ま)ら(ま)ら(ま)

見月

よの人た兼人のるうめえ限る月や悲うか学燈人

子系儀

娘と申す所多ぬ山にありて此の地は草

春書

かたしは尻上北流山に松を植ふる事此を

寄山意

二雨そぬゆ海方北山に松を植ふる事

寄海意

ゆき清くし心きこひの世乃人北意海と傳ひ

祝言 有記

ちあふ

神ち山は素を記かりわよとを北松やとひとき

廿三日備前入道 浄元 の家めく鎌守

わり

冬胡日

山高まひまゆゆも申のひさておのり代いそくあふ

冬嶺松

一りこれ松の嶺よを結て石肌うけつる山は

冬舊意

志るん衆の嶺の松はちとく高し世えあふ

冬古寺

夕乃く道都との吾れ松也且そのまはるんを白ひゆり

廿八日右巻末依れ家あしく續きあり

初冬時節

夜ふ先時多そ冬れうらうとゆめやこぬめわの雲

欲別意

身よかてこぬ別とふ種わぬの世れゆきの道

山裏松風

多し頃時荒も山と出れぬ松もやうて想あつらん

新中道都懐

かり松波のうちみ尼舎と告そ都めくひまの月

廿九日波理たまれ家あしく小野は来あり

一申り

年内立春

かひあ欠ひうらくれの年うらまひれ月や暮れ暁

寄 寄 花

依保姫や綿より産あれぬき産れそのむ乃山凡

本林 東 魚 橋

夜のいそ

本村りよふがむし道は徳り後新橋の巻乃粒の巻

深山麻

ふは麻れ輝のん山乃昔送るのれれす心志はあらん

鴻月

かひまをともせぬよ秋れれ鴻神の月れあまの巻衣

篠霰

太山りやきれひら葉とら山雲都よりり谷れ村竹

歳暮

年れきとんろえんおぬ天は凡やも吹ましく雲あらし

寄娘風意

小送れり葉葉の秋風来たりそり念は葉都は

寄船意

漕出ておふは舟もまきと舟もころし葉と文れあけの三舟

友以雨

うらりり昔れ人やあつれ春本よあらしあらし

神祇

神や又神のひりれ徳志あえ右れる傷も光向し

十二月二日号が備乃家れ月次り

在馬場

驛路電

水馬ヤ

此後の浦や山ちも空氷ちやんぬらもうぬれ舟は色

燼火似雲

地丈れうきに燼火國のうらみまき此後の衣とさき

田家鳥

唐あしき嵐もまやかすきに西路をわさうく又井小田

袖冬木枯 苗先

冬もそふぬれうら乃梢さへんま本枯おりのさき

船中の電

釣白さびま帆も流とけぬ松浦の奥此電のなま

寄獣意

のりえあやま川の車志りさきとさきけか意を

寄席意

白あけ袖のさあありなる寒のまきぬらむら此意

お山猿叫

雲ゆけあくう山のねこれ嶺月のとありま猿叫あ色

大伴皇社 大日佛地院傳部長兼真行まそ大伴

里を此社まそ百首のはれありし中ま

日案中五去

さ浪やけりし舟と大伴此之世其さそがもみあ

春五

吾きりし野原の面下緑草の枯葉とらむ心も

夕立

うらそ竹雲さそくあまさうらひまけつくそ夕立は

蝶夕

二かたにさとあつく人せうくそ秋と夕立中あつと

野月

月も又枕とやせ人一夜新地は山まき此時の枯葉と

落系

ちりゆとらゆくと強うたき此の系のはれとれいあ

家煙意

今とそり人烟れ志うくも海にそとせあうつは

家玉意

君も志まきこのはれあうひこい秋ねらあれあうと

嶺上

岩もけしう松あけしとそ秋やれと云ふのむれとやう

六日同長算乃坊此月次子

秋樂

うき心く、秋と秋ぬよふこと枕とや此よの砂え時乃

歳暮

七年此暮とむふ年と暮ぬわらんぬとむひやし

鴻志

浪あきき真此小橋の松乃ぬ玉津守より秋やうを

田残馬

首尾

降つり田西此暮にうけとて時なりと年と暮を思ふる

歳暮意

うのつぬ乃秋よゆく多此相傳ふし七年此暮と暮を思ふ

秋終年意

海ひらく道のう系後うとておけぬ松をわきとふり乃

山家

禱りそのそ葉之かこぬ石垣此山きりあむ唐えりる

羈旅

ゆいとそ乃と秋此旅人か暮さし中みかりりやいとぬ

八日同坊あを續之あよるし中よ

山

早春雪

今朝そとふ冬は言根よはりり雪をまふの此雪

梅雨晴

み月ぬれ舟のうれ雲も世に建つてはれ時をいさ

新秋意

やうりよの草もともともやまにさうさめ秋の初

浪子鳥

夕の鳥つまもかきそやとほげらうらうら浪よん

寄 蕪 庵

昔 山 毎

このまよふみなの加うぬ蕪も移とそやんぬ此奥に
いづれむ世のうれ時のふらむかひに毎よのうらうら

十日た系ちまは家の月次日

埋 火

園上は石もぬれ埋火とてはあそよさゆう神

年 欲 昔

後世はあふれとこころをかめてらそぬ年更は

回 家

わきりつら秋回りの冬の冬に床のりか人並と流るる雲を
水 南苑

わら雲に袖の如くなるそゆく襟のほれ嶺に水上
題意

此物もやあるは床のりか鳥やあつて遠もあつて
山家

嶺に床のりかおの世語にのまのあつてさやとさ
懐舊

しゆめそひのりもあつてさよとせ人並と流るる雲を

十一日或下の月夜入るる雲に宿也

雪

冬残りぬ雪に宿も昔年の人並と流るる雲を

水鳥

およわふ里神楽より神にまの枯の他は於鴨の一点

意

なみ宿むるよきそよみの境やかき恨のりまをかん

朝木枯 南苑

こしゆり月此樹の影をとるらふらうひき木枯の影

後鴨

送日雪深

思ふに後や来る此行の予くも此舟にかけ渡す所は
寄雲意

是中に思ひにたやこの世まのころ契れり此意は
寄雲意

雲を思ふ

送ぬ此舟の雲と此舟に舟より出てもこのつらぬ
漢客

いさりと此舟に舟よ焼くといふをこれか
十四ヶ月舟を寺といふ寺はく備前

入道 浄元乃家此舟改さるる舟

早梅

在明且年の初此舟の舟も月影をさす山の風

歳暮雪

年暮るよゆくといふこの舟に舟は舟に舟に舟

恨意

舟此舟に舟に舟といふこの舟に舟に舟に舟

時雨 舟

二方舟に舟に舟といふこの舟に舟に舟に舟

不達意

まの志願いわふ難し秋ふあまのわらふ余ありせむや津入

鶴

又これぬる見らる浦北境ひこころゆく鳥の松々松系

少弼

なるとて女けりも船とよそをみぬ川の嶋北里人

女の

十八の草庵めでははしやし中身

初冬月

冬とそや常も雲にづらふ人ほあま妙つ夕月あが

初達意

二可くあう一之痛の松枕今敷らるる片と風

秋松

嶺上松

めらりきそ高根は雲み出ら月わはれ夕やよきにあらん

晴天鶴

影らく何れいともあめれはのえぬれの霧れ衣

廿日忠徳院の月次

冬強月

長近き廿日此月のをた敷よるうく清くお妙き

歳暮松

年この海もあやかしむる松は昔も昔の奥津白浪

鷺立行

川をさす夕の鷺の川別れさすや河の君は村は

初冬嵐 南无

山松れをねわりしも吹さかりさればねらう神を

綱代

河風やわらうるの男は山松をさす毎も昔はさすのぞ

庭電

若もあしりしと下と忘れ初は彼なき言にのころ西歌

俄変意

浪多ふみおと出てくろ川の環わさるは彼方ゆは

を樹鷄

冬かまきりぬあのことろく斗ゆふ時鳥はさす

旅泊面

大船のうらみもやとゆりやさく川面せき座よおき

廿一日若の庵見く徳神は楽百首此

中(り)

立妻

おこまけの國津より川の秋風よ今更らるるを
きよき

山家花

侍人母を尾上北初梅うたぬと
る人今更らるる

夏月原

涼きさいり夕立るる庭より
月をさるるてき浪吹丸

古御家

さかみもあつと海草りまの世の
かよひはなほあはれ

松雪

いと梅のきかたの松人や
はむりかりやれ吾に想ふ人

寄煙意

若やき山田れやぬふ
あつとるもがらむむの烟を

古寺境

あつとあやいもそとふ
細山との北境の巻と柳う

秋妻

らよりほふみのあつとる
山のたにらるる月をまわく
度

廿四の経理更北家
めて年忌北 續

あつとるー申う

冬曉山

うえは月夜にわたりてけしきくはるるの心

宗庵

あまのこゝろをよめるその小田はあはれりとの知の終

居士

せよそふをいかにわらふの深山

雪やかる

